

(肝属郡大根占町城元)

位置と環境

轟木ヶ迫遺跡は、町の中央部から北東側へ約1.8mの中部丘陵地帯にあり、標高約160mを測るなだらかな丘陵の腰部から南面する傾斜地に位置する。現在は、開墾による削平が著しく、丘陵斜面に立地するため遺跡内の比高差は5mに及ぶ。

調査の経緯

発掘調査は、農用地開発公団による畜産基地建設事業肝属第二区域（鳥浜団地）に伴い、大根占町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、昭和62年（1987年）6月1日～8月5日までに本調査を実施した。

遺構と遺物

遺構の検出はなかったものの、縄文時代、弥生時代、古墳時代の土器、石器等の遺物は約8000点を越える出土となった。指宿火山帯の東側に位置する本遺跡には、縄文時代から平安時代にかけて池田湖や開聞岳が活発に噴火活動を繰り返していた時の火山堆積物がみられ、遺物との関わりも興味深い。

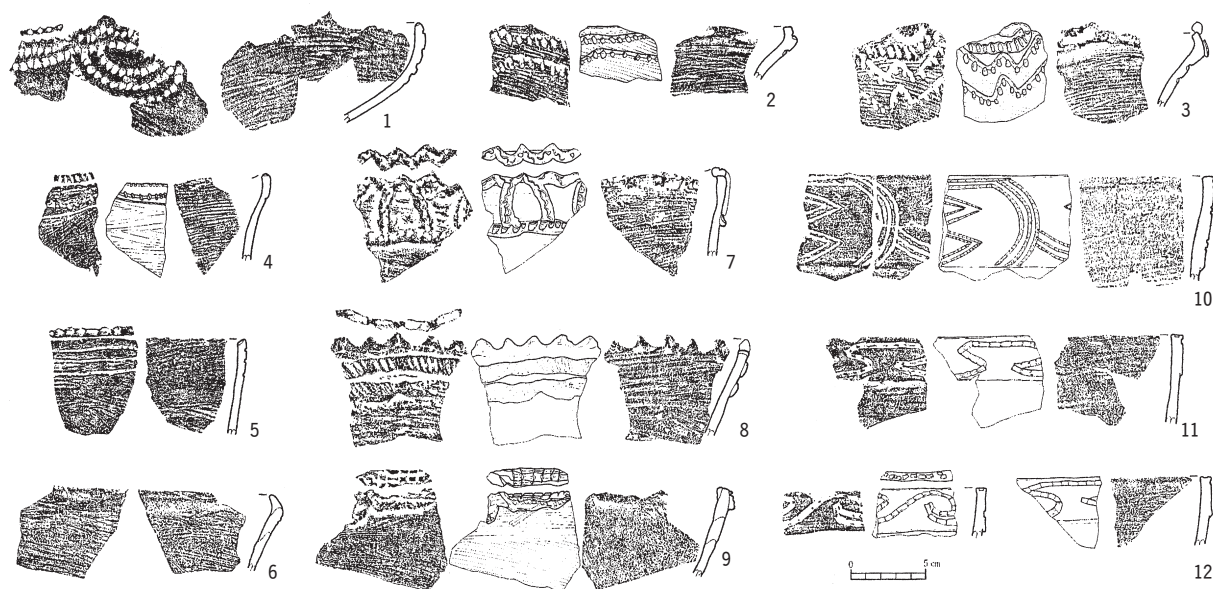
轟木ヶ迫遺跡では、縄文時代中期の土器である春日式土器が主体的に出土した。これらの土器は池田火山灰よりも上位で、しかも黄ゴラ相当層よりも下



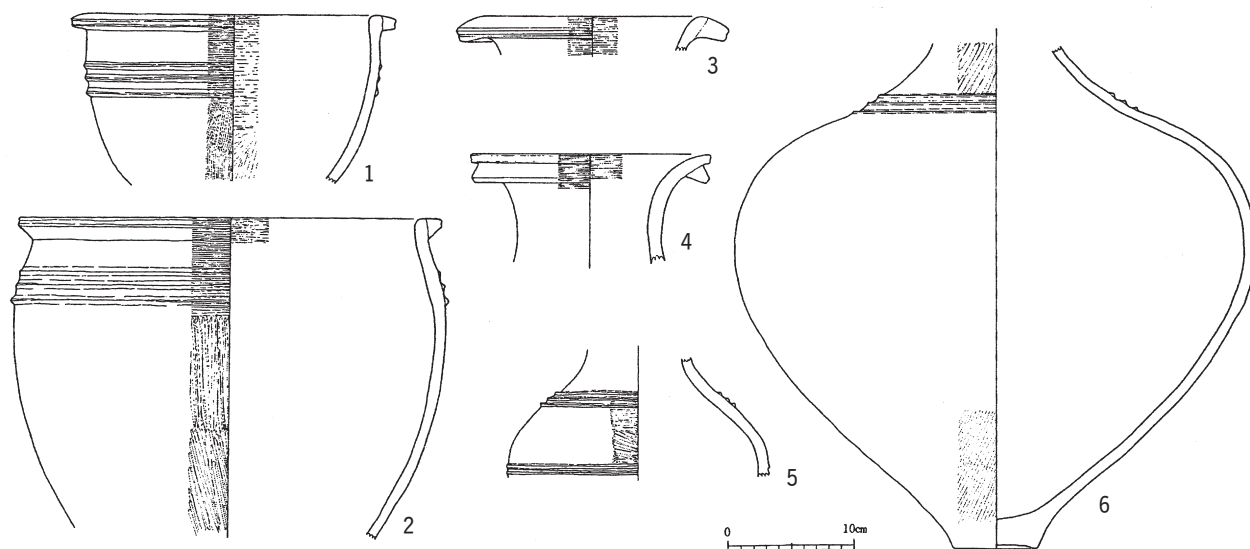
第1図 轟木ヶ迫遺跡の位置

層に出土したことにより、層位学的に上限及び下限を知ることができる。本遺跡出土の春日式土器は、口縁部のキャリパー形が弱く、文様も口縁部に集約される。底部をみても、上げ底よりもやや張り出す平底の方が多くみられる。また、太めの突帯を施す例が多いことと、他の遺跡で春日式土器に伴う瀬戸内系の土器が全く伴わない点から、春日式土器の中でも後出の型式であることが分かった。また、肥厚させた口縁部文様帯に押引き手法を用いて文様を描く大平式土器類似の土器も出土している。縄文時代の層から出土した石器には、石鏃・磨製石斧・搔器・石皿などがある。

弥生時代前期末～中期初頭にかけての土器が開聞岳噴出の暗紫ゴラよりも30cm下位から多数出土した



第2図 縄文土器（1～9春日式土器，10～12大平式糸土器）



第3図 弥生土器（1・2甕形土器，3～6壺形土器）

点も注目される。山ノ口式土器の標識遺跡である同町山ノ口遺跡では、直接暗紫ゴラが土器を覆っていたことから、層位的にも轟木ヶ迫遺跡の土器の方が古いということが確認できた。また、この限られた時期の土器に伴って、4本の石製土掘具と3本の柄が発見されたことは大きな成果であった。製品の他に、同じ石材である頁岩の剥片が大量に出土しており、この場で製作していたことを窺わせる。また、3本の柄は、製作時における破損というより、使用時に折れた可能性がある。壺形土器や甕形土器など日常生活具に伴って出土していることから、居住地に近い場所で石製土掘具が製作され、居住地周辺に石製土掘具を使用する場所があったと考えられる。水田耕作が出来るような土地は近くにはなく、弥生時代以降の農耕を考える上で有効な資料となった。

古墳時代の土器は開聞岳起源の青ゴラによってパックされた状態で出土した。甕形土器の口縁部が内

湾し、壺形土器に幅広突帯をもつ笹貫タイプの成川式土器である。

特徴

縄文時代中期の春日式土器がまとめて出土し、形態的な特徴から春日式土器の中でも新しい時期である「轟木ヶ迫段階」が設定された。瀬戸内地方の船元式・里木式土器を伴わないことから中期後半に位置づけられることが分かった。また、弥生時代中期前半にも石製土掘具が使われていたことが確認できた。

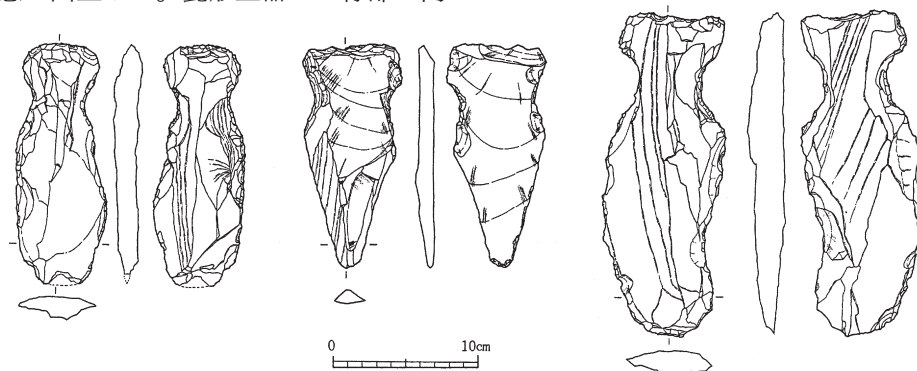
資料の所在

出土遺物は、大根占町教育委員会に保管されている。

参考文献

大根占町教育委員会1988「轟木ヶ迫遺跡」『大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

（東 和幸）



第4図 弥生時代の石製土掘具